

実力発揮の初優勝

船の上で始めたゴルフ

《男子の部》

1オーバー 73

79歳の瀧下幸治(ザ・マスターズ天草)



ホールアウト直後の瀧下の口からは反省の弁ばかりが出た。「ドライバーが真っすぐいかん。やっとかさパーを拾えた。今日は寄せとパターでしのいだ」。そこには満足表情はない。1オーバー73。スーパーシニアの平均優勝スコア75前後と比較しても、むしろいい方である。ただ本人は得意とするドライバーが思ったようにならず、練習ラウンドでは1アンダー71で回り、今回の優勝スコアも「アンダー」と予測していただけに納得にはほど遠かった。

インスタート。10番で70cmのパーパットを外してボギー。続く11番でもボギーを重ねる。悪い流れ。だが、12番で1パットのパーをセーブして一息つく。そして14番ロングで30cmにつけてバーディー。インを37で切り抜け、後半のアウトを1バーディー、1ボギーのパープレーで耐えた。不満足ではあっても、スコアを作れるのは実力の証明。熊本県内では一目置かれるプレーヤーであり、2018年の九州グランドシニア（大分東急）では惜しくもプレーオフで敗れたのは記憶に新しい。

熊本・天草出身の瀧下は中学卒業後、船乗りになり、21歳からは外洋航路につく。甲板上で先輩の船員たちがボールにひもをつけて海に打っている姿を見て、彼もクラブを借りて振るようになった。これがゴルフと出合いだ。オーストラリアのメルボルンに寄港した際には先輩から初ラウンドに誘われた。それがラウンドとは知らない瀧下は「そこには芝がきれいに敷きつめてあって、まるで公園のようだった。こんなきれいでやれる。それならゴルフをやろう」。それからはアメリカなどでも寄港した際にゴルフ場に出掛けるようになった。我流で覚えたゴルフを本格的な競技に向けたのは船を降りた翌年の66歳からだ。

「今後の目標？ 仲間がいてゴルフができればいい。ゴルフをすると気も若くなるし、ストレスもたまらない」。そう言って目尻にしわを寄せた。

踏ん張っての初優勝

孫と一緒にゴルフが楽しみ

《女子の部》

6オーバー 78

69歳の高山みどり（福岡サンレイク）



今年12月で70歳を迎える前に、自らの手で古希のお祝いをした。「嬉しいですね。優勝するには70台は出さないといけないと思っていた。目標は福井さんでした。あの方は2度勝っているし、雲の上の人ですから」。福井和子（ブリヂストン、75歳）はかつて日本女子シニアに優勝し、今大会も一昨年、昨年と連覇。スコアは73、77だった。『打倒！福井』を目指して大会に臨んだ高山だったのだが、その目標が腰痛のために途中棄権。もし福井が18ホールを完走していれば、競った試合になったのかもしれない。

「パターのお陰です。結構長いのも入った」。前半のアウトはまずまずだった。バーディーはなかったものの、2ボギーだけの38。しかし、後半になると10、12、13番とボギーが先行した上に、14番では池にもつかまりダブルボギー。「諦めていたけど、我慢すれば、40で回れば、どうにかなるのでは」と自分に言い聞かせて16番ショートで初のバーディー。それも15mのパットをねじ込んで踏ん張った。インは40ジャスト。ダブルボギー後の4ホールを1アンダーとしたのが初優勝につながった。

ゴルフは30年ほど前に始める。ご主人の忠澄さん（70歳）に勧められた。夫婦一緒のラウンド後の「晩酌」が共通の楽しみとなっている。今ではラウンドの輪の中に23歳の孫娘も加わるようになった。「最近、孫が100を切ってね。成長が楽しみです。じいちゃん、ばあちゃんと一緒に回って、家族でゴルフができるっていいですね」と微笑んだ。

週3回の練習に、月8～10回のラウンドを欠かさない。「今年はこの大会を目標にやってきました。来年は連覇に向けて頑張ります。一つ年を取りますが」。プライベートにも競技にもゴルフをエンジョイだ。

《くまもと城南CC》



